

## 会長に就任して

細野 公男 \*

慶應義塾大学文学部

今回、藤原鎮男先生の後任として、会長の職をお引き受けすることになりました。現在情報知識学会は、種々の課題に直面しており、そうした課題に迅速に取り組むことが求められています。微力ではありますが、会員の皆様方のお知恵を拝借しながら、会務を勤めていきたいと思っております。ご協力の程どうぞよろしく申し上げます。

情報知識学会は、これまで多くの観点から情報と知識に関わるテーマや問題に取り組み、大きな成果をあげてきました。しかし、今後さらなる発展を志向するには、常に本学会の活動の前提である情報と知識の概念の本質を探究し、社会の変化や発展に即応したその応用・適用を考えていかねばならないと思います。

情報ということばを最初に使用したのは、陸軍少佐酒井忠恕といわれます。当時は軍事用語でしたが、その後種々の分野で使用されるようになり、その結果、情報の定義、意味、特徴、機能、範囲、処理方法、現実社会との関係などに関して、それぞれの分野固有の捉え方がなされるようになりました。

情報の定義の例として、情報をプロセスとして捉える見方があります。そこでは情報を人間の持っているイメージあるいは知識の変化と密接に関連させ、それを必要とする人の知的活動になんらかの影響を与える刺激と考えるのです。この場合情報は主観的で受け手志向であるとみなされます。図書館などにおける情報サービスは、こうした観点から展開されているといえます。

人間との係わりを意識せずに情報を定義する代表例が、Shannon-Weaver 流のビット列としての情報です。こうした観点からの情報

は、データ処理の世界での捉え方として一般的といえましょう。ゲノムなどの世界で論議される遺伝情報は、これらの情報の中間に位置するように思われます。

知識も種々の側面から捉えることができる広い概念であり、万人が納得できるような形で定義することは、困難といえましょう。一例として、「外界の事物やデータを理解・評価しそれから意味を抽出するために使われる、個人的・社会的に知られていることの総体・しくみ・体系・構造」と定義することができそうです。換言すれば、意思決定を行うための行動規則ともいうことができるでしょう。知識の概念が主たる構成要素となっている分野は多く、知識ベース、知識工学、ナレッジマネジメントなど、知識の処理と関連する種々の研究領域が存在します。

データや知識の概念は情報との類似性が高く、その違いは、明確ではありません。これはデータ、情報、知識がさまざまな専門分野で使われているだけでなく、一般的なことばとして日常でもよく使用されているからです。しかしこれらを意識して区別すると、次のように考えることができます。

データは、表現メディア(文字、数字、画像、音)で構成され、事象・現象の記述など論理的に意味のあるメッセージであり、客観的な実在・実体とみなすことができましょう。その例として、特定の状況における価値が評価されていないメッセージ、数値や特定の事象・現象の記述、コンピュータに蓄積されその後の処理の対象となるものなどがあげられます。そして手元のデータの中に問題解決に役立つ何かを見出したとき、このデータから情報を得た、またはデータが情報に変化したと考えることができます。なお、コンピュー

\* hosono@slis.keio.ac.jp

タシステムの状態を変化させるデータも情報と考えることができます。

情報と知識との違いも種々の観点から捉えることができますが、その一例として次のように考えることができます。

- 情報はばらばらでかつ断片的・個別的であるのに対し、知識は構造化されており脈絡を持ち、普遍的である
- 情報は時宜に適うものであり、一時的で短命であるのに対し、知識は永続的である
- 情報はメッセージの流れであるのに対し、知識は蓄積物である。

このような捉え方は、情報の入手が知識構造の再構築や知識の変化を誘発するが、情報そのものが知識となるわけではないことを示唆します。新聞に報じられた新発見は情報となり得ますが、それが他の記事やこれまでに蓄積された知識とうまく融合したとき、知識ともなります。これは情報と知識には、時間差があることを示しています。

また、社会や組織に固有な文化は、情報や知識の重要性、価値、有用性に関する意識に影響を及ぼします。たとえば情報公開に関して行政機関がどのような態度をとるかは、その文化次第でしょうし、情報の利用における契約や知的財産権・特許権など法律と関わる側面にもそれがみられます。

情報や知識に関わる分野はきわめて広範であり、現在も拡大・発展しています。またこれらに関する種々の活動は、現代社会に大きな影響を及ぼします。これは、本学会の活動の重要性、可能性の大きさを示すだけでなく、本学会が社会の健全な発展に大きな責任を担っていることも示しているといえましょう。したがって、会員諸氏がそれぞれの立場や分野で、情報や知識の概念およびその応用をどのように捉えているかを互いに理解することが、学会の活動、プロジェクトを推進するにあたって、きわめて重要といえましょう。

こうしたことを踏まえて今後の学会活動を円滑に遂行するために、現時点で重要と考えられるのは、以下の点であると思われます。

本学会がその役割を果たすためには、活動目標を一層具体化し、それを強力に遂行する必要があると思われます。この点に関しては、会誌12巻1号に掲載された藤原前会長の「平成14年度総会 会長挨拶」で示された考え方および方針は、非常に重要であります。

学会誌は編集体制が整備され、発行が順調になりましたので、この体制を維持することが大切です。そのためには会員諸氏の積極的な投稿が不可欠であります。編集委員会での検討の結果、学術論文だけでなく、各種の報告、ニュース、お知らせなどの投稿も歓迎されるようになりました。学会誌は、研究成果の発表の場であるだけでなく、情報交換の場でもあるからです。なお、情報交換の側面では、月例懇話会がこれまで大きな役割を果たしてきました。今後もさらにこの活動を充実していく必要があります。

部会活動のさらなる充実も取り組むべき課題として重要です。現在、専門用語研究部会、CODATA 部会、人文社会学系部会、SGML/XML 部会があり、シンポジウムやセミナーを開催しています。これらの活動のより一層の活性化と、さらには必要に応じた新たな部会の設立を考える必要があると思います。

さらに、年次研究報告会の運営体制の整備と高等学校での教科「情報」に関する取り組みとがあげられます。理事会を頻繁に開催することが困難なため、常務理事会で理事会の活動の一部を代行することが行われてきました。これは円滑な学会活動の運営を考えれば、妥当と考えられますが、手続き的には十分こなれていない部分があることも事実です。役員選挙の方式についても同様です。定款の見直しも含め、こうした点を整備する必要があると思います。しかし、学会運営にとって最も重要なのは、人の和であると思います。小さな学会でありますので、あまりフォーマルにならず、阿吽の呼吸で会務をこなしていくことがあっても良いといえましょう。

最後に会員諸賢の一層のご支援、ご協力を重ねてお願い致します。